

ねこ





お
い、
お
前
ら

俺
の
体
撫
で
過
ぎ
や
ろ

「猫のきもち」



昼下がりの公園。ここ数日厳しい北風が吹いていたが、今日は風もなく、うららかな小春日和だった。こういう日になるときまつて、猫たちはこぞつて日向ぼっこをしに来るものである。

「なあ三毛君、どう思う？」

「なんだい寅さん？」

「どうして干支に、猫年つてのが無いもんかねえ。」

「だってそりゃあお前、無いもんは無いよ。人間が勝手に決めたことだ。ところでどうしたんだい？」

「この前犬のハチに会ったんだ。奴ああのキンキン声で、もうすぐ成年なんだぜとかいってからかいにきてよ。悔しかったから奴の尻尾を一噛みしてやった。」

「そりゃあ悔しかったな……よしここはひとつ、人間に俺たち猫の存在感をアピールしようじゃないか！」

「ようし」

「まず俺たち猫は、どんな奴より紳士だ。身なりには気を使うし礼儀正しい。」
「おうよ」

「どんな奴より機敏に動ける。暗いところでも目が利く。高く跳べる。」

「でも、それだけじゃ、インパクトつか……いまいちパンチが弱くないか」

「……」

「……」

「じゃあ、人間に媚びてみるつてのはどうかな？」

「可愛さで勝負するつてところか。ありかも。」

「たまには子供にも頭を撫でさせてあげる。家の鼠を退治して、人間に奉仕する。」

「そうやって地道に努力していけば、じきに干支昇格つて寸法だな。」

「でもよ、コツコツ頑張るつてのは、どうも俺の性に合わないんだよな。」

「まあなんだ、気長にいこうか」

こうしてふたりは、暖かい陽射しを浴びながら、まどろんでいった。

…タイには、ちゃんと猫年があるそうです



く猫の手を借りてみてく

「魚を返せ」(魚屋)

「ネズミを返せ」(ペットショップ)

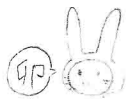
「いい爪だった」(彫刻家)

「むしろ耳を借りたい」(メイド)

「あれは手ではない。前足だ」(理系)

「関心を持て」(小判)

「もうずっと近くにいて」(私)



「猫はじめました！」

行きつけの喫茶店の入り口にその張り紙を見つけたとき、僕は「またか」と思わず口に出した。これで何回目なのだろう。僕は半ばあきれつつ、扉を開けて中に入った。

案の定、カウンターには一匹の猫が座っていた。その辺にいそうな、いたって普通の猫だった。僕は短くため息をついてひとこと

「マスター、いったい今度は何で猫になっちゃったんですか」

と猫に問いかけた。すると猫は

「いや、まあ……そういう気分なんだな」

と答えた。そう、実はこの猫こそがこの喫茶店のマスターなのだ。彼（声の低さからして男だと思ふのだが、実際はよくわからない）はなぜか人間でいようとしないのだ。

この間まではテーパーコードだったし、その前はフクロウだった。その変身はたいがいがそれほどの理由のない思いつきだったりするから困る。

「ホットコーヒー、いつもの」

と言うと

「いつも通り自分で淹れてよ」

と怒られた。しかたなくカウンターの中へ入って自分の分のコーヒーを注いだ。マスターにもコーヒーを飲むか聞いたのだが、俺は猫舌だからコーヒーが嫌いなんだ、と言われたので淹れなかった。

「しかし、猫はいいな」

おもむろにマスターは語り始めた。

「仕事はしなくていい。一日中、日向ぼっこをしても許される。俺も猫に生まれたかったなあ。しかも、猫カフェってのが巷では流行ってるんだろう。この喫茶店もこうして猫がいるんだから立派な猫カフェの仲間入りだな」

そう語るマスターの顔は得意げだった、たぶん。猫だからよくわからなかったが。そんな得意顔のマスターに申し訳なく僕は言った。

「……実は僕、軽い猫アレルギーなんですよ」

マスターは絶句した。僕は追い打ちをかけるようにこう言った。

「それに同じ喫茶店なら猫カフェよりもメイドカフェの方が人気ありますよ」

次回、僕が喫茶店を訪れたとき入り口に「メイドはじめました！」と張り出されていたことは言うまでもなかった。

隠れてこっそりと餌をやる人

それとも

見て見ぬふりをして通り過ぎる人

いったいどちらが正しいのだろう

野良猫



「真鈴^{まじん}、今度の日曜日……どこか遠出しないか？」

優しい顔でそう言ったのは、牧仁^{まきひと}さん。

牧仁さんとあたしはその……同棲^{どうせき}していて。今年で二年目になる。

——うん、もちろん。

牧仁さんとデート。あたしは、自然とほっぺが緩むのを感じた。

牧仁さん最近、レポートやら中間テストやらで忙しくて。あんまり構ってもらえず、淋しい思いをしていたところだったから。

きつと幸せなデートになる。そのはずだったんだけど……。

——牧仁さん、大丈夫？

あたしは心配そうな顔で牧仁さんを覗き込んだ。

「うん……大丈夫……こほっ、こほこほっ……夫。」

牧仁さん、あんまり大丈夫じゃなさそう……。

連日の徹夜が祟ったのか、ついに風邪をひいちゃった牧仁さん。

——38度6分……。

高熱のせいかな……牧仁さん、震えてる。

デートどころじゃなくなったあたしは、牧仁さんが心配で心配でたまらなくて。

……こういう時、言葉が伝わらないのってつらい。いくらあたしが牧仁さんのこと心配でも、何かしてあげたいって思っても、あたしのノドは、コロコロコロ……って鳴るくらいしか出来ない。

後、あたしに出来るのは……。

「ん……暖かいよ、真鈴。」

牧仁さんのベッドに潜ってあげる……。

——早く良くなってるね。絶対だよ。

「真鈴（♀）、湯たんぽ中」^{じゅうぽ}



ねこに小判

ぼくに彼女

『とある工業大学生の価値観』

ぽかぽかとした陽気の午後

公園の砂場に一匹の三毛猫がいた

つやつやとした毛並みでふっくらした体は

ぎゅっと抱きしめたら気持ちよさそうだ

動物が大好きな彼女はねこの隣にそっと腰をおろした

華奢な手が毛並みに沿ってそっとなでていく

ねこはすっかり気持ちが良くなってしまったらしい

仰向けになって甘えている

僕は放っておかれたまま

その姿を見ているだけ

まったく、ねこのやつ羨ましいな

ねこになりたい…


「ニャンニャン♪」

④「……なにやってんの。」

「今の私はネコなんだニャン♪ ネコになって一緒に遊ぶニャン♪」

「この年でネコの着ぐるみパジャマはさすがにないわ。」

「そんなつれないこと言わないで、やってみれば楽しいニャン♪」

「あいにく俺はイヌ派でね。」

「もう、いいから一緒にニャンニャンニャンするニャン♪」

「……」

「……で、どうしたのかニャ？」

「……ほう、そうか、お前は一緒にニャンニャンしたかったのか。」

「……!! ち、違うニャン! そう意味じゃなくて……」

カプッ

「ニャウッ! く、首は噛まないで……」

「(首の後ろを噛まれたら大人しくなるなんて、完璧にネコだな。)」

ドサッ

「ニャウッ!」

「さく、お望み通り『ニャンニャン』しようか♪」

「ニャ、ニャ、ニャアアアアア……!」

「ネコアンビ♪」



男が布団の中に潜ると、そこには子猫がいた。

寒いからか、体を丸めて寝ている。

子猫はかすかに目を開け、男に身を寄せた。

近寄る子猫の頭を男はやさしくなでる。

そしてその小さな命を抱きしめ、その日は子猫と寝た。

ふと気づくと、子猫は女豹と化していた。

女豹は何かを渴望したような目で、男の上に覆いかぶさっている。

「はあ、はあ…。私の鼻をくすぐる獲物の香り…。あなたをいただけるというのはなんと幸せなことでしょう。ただ、せつかく私の獲物を横取りする者がいないのに、あなたをじつくりと味わわないなんてもったいないわ。身体だけでなく、悶え苦しむ姿まで食べ尽くしたいところね…。」

そういうと女豹は男の全身を舐め尽くした。

ざらつく舌の感触と、いまに食われるかもしれぬという恐怖は男の体を強張らせた。

「あなたの肉はあなたが死んでもいくらでも味わえるけど、あなたの生の温もりはお前をかみ殺してしまつては決して味わえないわ。」

女豹はそういつて、男の上唇と下唇の間に舌をねじ込ませた。

「んんっ、んんん…」

男は声にならぬ声を出している。

女豹の舌は男の口内を探った後、耳から徐々にあごの方に達し、首筋をなぞった。そして男の脇の下から横腹、背筋をつたう。男の動悸が恐怖とともに増していく。女豹は時々男が死なない程度にやんわりと歯を立てた。その痛みに悲鳴を上げながら男は身を振らせる。

「さて、そろそろいただこうかしら…。」

男の体はみるみるうちに女豹に吸い込まれていく。

こうして、男と女豹は一つになるのだった。最高の歎びとともに…。



吾輩は猫

である。名前

はもうある。ど

こで生まれたかは

見当がついている。なんでも

そこで

不良品と判定されて特売所に置かれたことだけは覚えている。

吾輩は買われて行った先ではじめてネズミというものを見た。しかもそいつのせいで耳がなくなってしまった。このネズミというのは時我々の食い物を漁るという話である。しかしその当時はそんなことより自分の耳がなくなっただけのことの方が重大であつたから別段汚いとは思わなかつた。ただ彼の歯で耳をガリッとやられた時なんだかゾワゾワした感じがあつたばかりである。鏡の前で少し落ち着いて自分の顔を見たのがいわゆる今の自分の見始めであろう。このとき妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一耳をもつて裝飾されるべきはずの頭頂がつるつるしてまるで球だ。その後猫にもだいぶ会つたがこんな丸顔には一度も出くわしたことがない。

『吾輩は未来の世界のネコ型ロボットである』



もし、ぼくがもっと羊みたいにならないうわわしていたら、今よりもぎゅっと抱きしめてもらえるのかな。

(でも、あつくるしいっていわれて、夏はいっしょにいられないかもしれない)

もし、ぼくが二本足でも歩けるようになったら、もっときみに近づけるのかな。

(でも、それだと足が短すぎて、きみと手をつなげない)

もし、ぼくがきみと同じように言葉を話せるようになったら、きみはもっとぼくと話してくれるのかな。

(でも、きみはぼくのことを、ヒトともネコとも見てくれなくなるのかも)

もし、ぼくの耳が犬みたいに大きくなれば、きみの言葉をもっと聞いてあげられるのかな。

(でも、きみが泣いている声が聞こえてきたら、何もできないぼくはたえられないと思うんだ)

……やっぱり、いまのママがいいや。

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	猫のきもち	6 pt	4 位	0 sp
		フォントセレクトが絶妙です。 「お前ら」と粋がりつつも、ふにゃっとデレてる感が うまく伝わってくる今週の表紙でした。 イチオシフレーズ：「俺の体撫で過ぎやろ」		
02	タイには、ちゃんと猫年があるそうです	1 pt	7 位	0 sp
		のんびり会話になごみます。 のほほんと見せかけつつ、「人間に媚びてみるか」なんて、ちゃっかり戦略を練っているくだりが、よけいにかわいい。 で、タイでなくヴェトナムに訂正、だそうなby作者さん。		
03	猫の手を借りてみて	13 pt	2 位	0 sp
		ワンフレーズの名手、颯爽と登壇！ ひとつひとつの情景をコミカルに見せつつ、流れもしっかりつくられていて、さすが！でした。おめでとうシルバー・メダル!! イチオシフレーズ：「あれは手ではない。前足だ」「関心を持て」		
04	無題（猫ははじめました！）	5 pt	5 位	0 sp
		町に一軒、こんなお店があると楽しいですね。 CMのシーンのような、とぼけ味のマスターでした。 この長さの文章なら、タイトル、ほしいなあ。 イチオシフレーズ：「「いつも通り自分で淹れてよ」と怒られた。」「猫ははじめました！」		
05	野良猫	0 pt	11 位	0 sp
		どちらが？と問いかけられて、いちばんイケナイのは捨てた人だね、と思い至る。 個人の力ではどうにもできないもどかしさがふつふつと伝わってきます。		
06	真鈴（♀）、湯たんぽ中（にゃう）	3 pt	6 位	1 sp
		まあ、お題がお題だけにオチはすぐ読めてしまうのですが、ラストの「にゃう」に至るまで、いじらしくてかわいらしいねこキャラ全開で楽しめます。 で、まりんちゃんに風邪が伝染ってしまったり、しないのでしょうか。 特別賞：ぼっちで賞 from S班（牧仁さんがねこに話しかけていて最高にぼっち）		
07	とある工業大学	0 pt	11 位	4 sp
		むむ。これは自慢なのか？それとも、どうせ手の届かないもののななさ、というアキラメなのか？ 「工業大学生」である必要はないので、楽屋オチ疑惑を避けるためにも、もっと一般的にしておきたかったところ。 せっぱつまった感が評価されて最多特別賞受賞です、		

	生の価値観	おめでとう！ 特別賞：一步踏み出しま賞 from U班（ほら、理系の知識に関してはプロじゃん。そーゆーの好きな子いっぱいと思うけどなあ。） がんばったで賞 from W班（水曜の昼にがんばりましたネ） 彼女いらないんで賞 from X班（そういうこと） 演習室で印刷したので賞 from Z班（メ切ギリギリ） イチオシフリーズ：「ぼくに彼女」×2			
08	ねこになりたい・・・	<table> <tr> <td>1 pt</td><td>7 位</td><td>0 sp</td></tr> </table> そりゃあ、ねこには勝てませんわな。僕のしょんぼり感、伝わってきます。 指をくわえて見ているだけでは永遠に取り返せません。ねこに気を許しているほんわかな瞬間を狙って、何か有効な作戦を仕掛けたいところ。	1 pt	7 位	0 sp
1 pt	7 位	0 sp			
09	ネコアソビ♪	<table> <tr> <td>1 pt</td><td>7 位</td><td>3 sp</td></tr> </table> うーむ、これはコージョリョーゾクではないのか。そう思う方がヨゴれているのか？？と思ったら、やっぱりみなさまの判定も「アウト」でした。そりゃそうだ。 特別賞：シールのカスゲー賞 from R班（シールの力、スゴイっす。） ダイナミック☆公序良俗違反賞 from T班（けしからん！） 限り無くグレーに近い黒で賞 from Y班（アウト） イチオシフリーズ：「も～いいから一緒にニャンニャンするニャン！」	1 pt	7 位	3 sp
1 pt	7 位	3 sp			
10	夢に見た風景	<table> <tr> <td>1 pt</td><td>7 位</td><td>0 sp</td></tr> </table> こっちは文学としてセーフじゃないかな。 恐怖から歓びへ。エロティカルに展開して、肉体派のなまなましいインパクトが刻まれます。 かわいいでしょオーラ全開の今週、異彩を放ってユニークでした。 イチオシフリーズ：「さて、そろそろいただくかしら…。」	1 pt	7 位	0 sp
1 pt	7 位	0 sp			
11	吾輩は未来の世界のネコ型ロボットである	<table> <tr> <td>16 pt</td><td>1 位</td><td>1 sp</td></tr> </table> そーせきさんの文体模写、堂に入っとうまくできてる。けど。 ド○えもん依存すぎでしょ。もっと独立した作品として立てたい。シール付きだから仕方なく載せたんだからねっ！とTAさんたち。 初めての首位もゲットしたことですし、次はぜひゼロの更地から独力でおもしろきものを建ててくださいな。おめでとうゴールド・メダル!!! 特別賞：テッテテテッテター♪賞 from V班（きれいなシルエットですね）	16 pt	1 位	1 sp
16 pt	1 位	1 sp			
12	無題（もし、ぼくが）	<table> <tr> <td>13 pt</td><td>2 位</td><td>1 sp</td></tr> </table> 毛並み、足、耳。ひとつひとつの猫要素をていねいに組み立てて、やっぱりいまのママがいいや、と現状に落ち着く展開がほんわかあったかい。 絵本のページをめくるようなハートウォーミングな今週の裏表紙、シルバーメダルを射止めました、おめでとう!! 特別賞：グッドペーパー賞 from Q班（紙が他のコラムと違う←裏方事情により）	13 pt	2 位	1 sp
13 pt	2 位	1 sp			

イチオシフレーズ：「やっぱり、いまのママがいいや。」